

(題名) 大学禁煙化プロジェクトにおける学生禁煙支援「パッチ & メール」方式はどの規模の大学に有効か

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻予防医療学分野 清原 康介

奈良女子大学保健管理センター 高橋 裕子

京都大学保健管理センター 川村 孝

禁煙マラソン 三浦 秀史

関西福祉大学 東山 明子

背景 禁煙には綿密なサポートが必要であり、大学では保健管理センターが主にその役割を担う。しかし、学生数が多い大学からはフォローし切れないとの声も上がっており、そのために学生の禁煙成功割合が低くなる可能性がある。

目的 本研究は、大学禁煙化プロジェクトによる禁煙支援を受けた大学生において、所属大学の学生規模によって禁煙成功率に差があるかどうかを明らかにすることを目的とした。

方法 2003年11月～2005年5月に本プログラムに禁煙プログラムに応募し、ニコチンパッチ・携帯メールサポート・フォローを提供された大学生を対象とした。禁煙状況の把握は24週後に対面での呼気中一酸化炭素濃度測定結果によることとし、脱落例は全て喫煙とみなした。所属大学の規模別に24週後の禁煙割合を算出し、 χ^2 乗検定をおこなった。また、24週後の禁煙割合を転帰、大学規模・性・年齢・学部・ニコチン依存度 (FTND)・禁煙ステージ・国公立 or 私立を要因としたロジスティック回帰分析を行い、オッズ比および

その95%信頼区間を算出した。

結果 対象者は計305人であり、うち大規模校(10000人以上)所属者79人、中規模校(3000～10000人)所属者81人、小規模校(3000人未満)所属者145人であった。24週後の追跡率は全体で69%であり、大規模校所属者39%、中規模校所属者65%、小規模校所属者87%であった。24週後の禁煙割合は全体で27%であり、大規模校では15%、中規模校では25%、小規模校では35%であった ($p < 0.01$)。しかしロジスティック回帰分析の結果、大学規模により24週後の禁煙割合に有意な差は見られなかった。禁煙割合と有意に関連があったのは禁煙ステージのみであり、無関心期～関心期の者は準備期の者より禁煙成功割合が低かった (OR:0.3 95%CI:0.2-0.6)。

結論 全体で27%の学生が24週後に禁煙しており、プログラムの成果が確認された。大学規模による禁煙割合の見かけ上の差は、禁煙ステージ等その他の要因の交絡によるものであり、大学規模の差はプログラムの有効性にさほど影響しないと考えられた。